

成果報告書「アイヌの月の伝承・宵の明星の星名伝承について ―南北星文化比較をめざして」
(科研費・基礎研究 A「天体景観への認知と祭祀および暦の生成に関わる考古天文学の展開」(23H00021))

北尾浩一

1. はじめに

日本列島には、北から順に次のような言語の星名伝承が伝えられている。

- ・樺太アイヌ語・ギリヤーク語 ・オロッコ語
- ・大和語(津軽方言、薩摩方言等)
- ・奄美語 ・沖縄語 ・宮古語(多良間方言等) ・八重山語 ・与那国語

天体景観への認知を論じるにあたって、各々の言語の天体に関する名称の調査研究が必要である。本報告書では、アイヌの月の伝承、宵の明星の星名伝承から出発して、日本列島の南北星文化比較をめざしたい。

2. 月の伝承

(1)アイヌ

伝承は、語る人、語る時、語られる場所によって豊かに変容するものである。だから、伝承は生きており、世代を超えて伝える力を持っているのである。伝承の多様性こそが文化としての伝承の命である。2009年3月、二風谷でアシリレラ氏が月の中の人についての伝承を語ってくださった。

あるとき、いろいろのそばの子どもにおばあさんが言いました。

「水くみを手伝ってくれ」

子どもはめんどくさがり、いうことをききません。

「ばあちゃんがマキを取って帰るまでに、水を汲んできなさい」

そう言って、おばあさんは、薪(まき)を取りに行きました。子どもは、イヌンペ(炉縁、イロリのフチ)をたたいて言いました。

「おまえ(イヌンペ、イロリのフチ)はいいな。背中を火あぶりして、あたたかいな」

そして、足元の祭壇を立ったままあしげりして、水くみに行こうとしなかったのです。

クネばあちゃん(クネノチュウ、シネップノチュウ、一番星)の出る頃、子どもは、水おけを持って、「イロリの灰はここで何もしないでいいな」と、灰をつつきまわしました。それから、「水を汲まない」と、桶(おけ)をふり、ピサック(柄杓)を持って、川に降りて行きました。しかし、子どもは、水を汲むのが嫌で川で遊んでいました。おばあさんが家に帰ると、その小僧(子ども)がいません。おばあさんは、きっと水汲みに真面目に行ったのだらうと、川を降りて行きました。ところが、子どもはいません。桶が1つ置いてありました。

おばあさんは、川の魚に、「アメマスさん、私の子どもを知ませんか」と尋ねます。すると、アメマスは、「あの怠け者は、(アメマスのことを)斑点だらけの悪いやつというので教えない」と、教えてくれません。

困ったおばあさんは、「どじょうさん、どこに行ったか」と尋ねると、「川のつるんつるんで変な奴と言ったので教えない」と教えてくれません。

おばあさんは、海の近くまで歩いて、へとへとです。

「怠け者の子どもは、どこに行った。早く帰って！」

海の近くに行くと、サケがあがってきました。

「カムイチップ(神の魚、サケ)さん、あなたは私の子どもを知ってるのではないか」

おばあさんが、サケにそう尋ねますと、カムイチップ(サケ)は、「ぼくのことをカムイチップ(神の魚)と、子どもが言ったので教えてあげるよ。空を見てごらん。あれ、お月さんのなかに神さまに入れられちゃったよ。あのなかに持っていかれたんだろ。文句ばかり言ってるから、神さまが怒って、月へ連れて行った。桶(おけ)を持った小僧が立ってるんだよ」

それからというもの、怠けてる子どもに、「お月さんが怒(おこ)って、あのなかに持っていくよ」と言うと、子どもは、言うことを聞くようになりました。

※

※

月の中の人について、語る人、語る地域による豊かな多様性について、次ページの表にまとめた。

(末岡外美夫氏著『人間達のみた星座と伝承』には、下記の話者のなかの平目カレピア姫、今泉柴吉翁他伝承に基づく「月の中の子供」が掲載されている)

	金田一京助『ユーカラ』	更科源藏『アイヌ民話集』	久保寺逸彦『アイヌの昔話』	知里真志保『アイヌの神謡二』	アシリレラ氏の伝承(北尾記録)
タイトル	サンタトリパイナ-月中の童子説話-	なまけものの姿	月の中の人の起源	月中の人の起源を語る神謡-折りかえし「オワイ・オワイ・トルルケ・オワイ」-	
話者	不明(最後に「昔婆が歌った歌」)	千歳市蘭越・今泉柴吉古老伝承	日高 荷菜 平目カレピア姫 ^{おひな} 伝承	長万部村・司馬力弥翁 ^{し ばりきんぢ おきな}	アシリレラ氏(昭和21年生まれ)(平賀ヤオキ氏(富川)、アシリレラ氏の母「山道サキ氏」(明治44年生まれ、山の向こうの「むかわ町」出身)から聞いた話)
主人公	童子(男の子)	娘	童子(ヘカチ・ネ・クル)	少年	男の子(小僧)
炉	(彼は)爐ぶちを叩き叩き、かく云ひにけりー 『羨しや、爐ぶちは、水を汲まず』	小刀で炉縁に傷をつけて、「お前も爐縁だから、年中背中あぶりばかりして遊んでいて、水汲みをしなくてもよいから…」	イヌンベ 爐縁の前にある台木(イヌンベ・サウシベ)を火箸で叩いたりついたりしながら「羨ましいなあ、汝は台木だから水など汲まずにすむんだ」。爐縁をついたり叩いたりしながら「羨ましいなあ、汝は爐縁のことだから水など汲まずにすむんだな」。	小刀を出して炉を叩き叩き、「炉ぶちはいいな、神様だから水を汲まない」	イヌンベ(炉縁、イロリのフチ)をたたいて、「おまえ(イヌンベ、イロリのフチ)はいいな。背中を火あぶりして、あたたかいな」
続いて	戸柱を叩き叩きー 『羨しや、戸柱は、水を汲まず』	家の柱に手桶をぶっつけながら、「お前も柱だから仕事をしないで…」	「入口小屋(ム・アバウシベ)の戸口の柱は羨ましいなあ。水など汲まずにすむんだな」といって、ついたり叩いたりしていた。	戸口の柱を叩き叩き、「いないなあ、柱は水を汲まなくてもいい」	「イロリの灰はここで何もしないでいいな」と、灰をつつきまわしました。
探しに川へ	川添ひの道を我下りけり	川原の砂の上に履物だけがあつて、どこにも姿が見えない	川端へ下りて行ったが、童の姿も影も見えなかった。川伝いに下って…	川へ行って見たら、少年も手桶もどこへ行ったやら影も形も見えない。	子どもはいません。桶(おけ)が1つ置いてありました。
魚1/消息を訪ねた答え	鯨(アメノウオ)『われらは、童子がわれらを悪口して、「ポッポッやい!ポッポッやい!」とはやし立てて行きなれば、腹立ちたる故、童子の行くへを、我等云ふまじ』	赤腹ウグイの群れ/「あの子は、オレたちのことを、骨だらけで食えない奴だといって悪口をいうから、知っているけれども、行先きを教えない」	いとう(チライ)の群/「人間たちから、いつも-大口め(パラ・マササ)-といわれるのが癪だから教えてはやるまい」	ウグイの群/「少年はいつも俺たちをいじめて、おまえたちの口は、まるで尻の穴だ!と云つてののしつた。だから教えてなんかやらないや」	アメマス/「あの怠け者は、(アメマスのことを)斑点だらけの悪いやつというので教えない」

魚2/消 息を訪 ねた答 え	鱒の群/『童子はわれらを悪口し、汚い體!汚い體!と云ひたる故、我等腹が立つので童子の行くへを、我等は云はじ』	いどうの群れ/「お前たちは、オレたちを獲っても、肉のまじり奴だといって木の枝にひっかたりして、粗末にするから、子供の行った先きは教えない」	あめます(ツグシ)/「斑つき(オキシ・シヨ)かたつきといわれるのが癩だから童子の行った所は教えまい」	アメマスの群/「少年はいつも俺たちをいじめて、やけどして、おまけにおまえはそばかすだらけ!とののしつた。癩だから教えてやらないや」	どじょう/「川のつるんつるんで変な奴と言ったので教えない」
魚3	うぐひの群/『童子は、我等を悪口して、尖り口よ、尖り口よ、と囁きたる故我等腹が立つなり』と云ひつゝ、我を過ぎ行けり。	鱒の群れ/「お前たちは、オレが川にのぼったころは大事にするが、老魚(ホツチャレ)になると大事にしないで投げるから、教えてやるものか」	ますの群/「肉腐れ(ミ・チツク)肉腐れ!といわれるのが癩だから童子の行った所は知ってはいるが教えまい」	なし	なし
さいごの 魚	神魚(鮭のこと)の群/『童子に、我等が逢ひしときに、「神魚よ!神魚よ!」と我等によびかけたり。忝けなければ、一分四什を我等告ぐべし。水汲むことを厭ひ、爐ぶちを打叩き、戸柱を打ち叩いたるその神罰に、月神から捕へられて今は月中の人になりて居るなり』	鮭の群れ/「お前たちはオレを大事にして神魚(カムイチュブ)神魚(カムイチュブ)といつて、骨まで粗末にしないから教えてやるが、お前の娘は水汲みにきてお月さんはいいな、何もしないで黙っていろが、オレは家にいるとなんだかんだと使われる、といってお月さんを見ていたので、お月さんがなまけものみせしめに、月の中へさらって行ったのだ」	さけ(シベ)の群/「人間たちはいつも、神魚(カムイ・チュブ)よ!、神魚よ!と呼んでくれるのが嬉しいので教えてあげましょう」童子は神様から罰されて、手桶を持って月の神(カムイ・カムイ)のところまで立たされているのですよ」	鮭の子の群/「少年はいつも俺たちを見ると、神魚の子よ!金の魚よ!と云つてくれた。だからその行方を教えてあげる」「少年は水を汲むのをたまげたので、月の神が怒つて、少年を体ごと捕えて、月の中に裸のまま置いてあるよ」	カムイチップ(サケ)/「ぼくのことをカムイチップ(神の魚)と、子どもが言ったので教えてあげるよ。空を見てごらん。あれ、お月さんのなかに神さまに入れられちゃったよ。あのなかに持っていかれたんだろ。文句ばかり言ってるから、神さまが怒って、月へ連れて行った。桶(おけ)を持った小僧が立ってるんだよ」
結果	我見しに、げにも童子は、月中の人になりて居たり。されば、さんざんに涙を、われ落したり。ゆめゆめ、仕事をな厭ひそ、物をな毀ちそ。教訓	母親が泣く泣く見ると、月の中に手桶をもった子供の姿が見えた。	その言葉どおり童子は手桶を掲げて、月の中に立っていた。これからの人間たちよ!これを教訓として忘れるな。骨折りを惜しんではならぬ。教訓	本当に少年は裸のまま月の中に立ちつくしているのだった。だから、これからの子どもらよ、ゆめゆめ水汲みをいやがってはならぬ。教訓	それからというもの、怠ける子どもに、「お月さんが怒って、あのなかに持って行くよ」と言うと、子どもは、言うことを聞くようになりました。教訓

表1 月の中の伝承の比較(アイヌ)

アイヌの月の中の人の伝承には、次のような共通点と相違点がある。

- ◆共通点…①主人公 子ども(男女両方)。②子どもの行方を教えてくれたのは最後に出会う鮭(カムイチップ)。
- ◆異なる点…出会う魚は伝承による多様性がある。

(2) 樺太アイヌ

次に、樺太アイヌに伝わる月の中の人について表にする。

	阪口諒『樺太アイヌのオйна』	知里真志保『樺太アイヌの神謡』	名取武光『月と若水』
タイトル	月の人(THE MAN IN THE MOON) (ピウスツキ『Ainu Folk-Lore』)	月中の人「chux-aynu」(和田文治郎博士採集)	
話者		富浜(北尾注:樺太豊原支庁富浜村)木村チカマハ <small>とよはら とみはま</small>	樺太敷香郡泊岸村 新聞アイヌ 森誠藏氏 <small>しすかぐんとまりきむら にいとい</small>
主人公	私(弟)	ヤイスポの妹	水汲みに出た女
行為	私(弟)は姉に育てられた。毎日姉は水汲みに行った。姉は桶や柄杓をたたいた。	水を汲ませても料理をつくらせても怠けた。ある日ひどく小言を云ったら、ふいと家を出たきり戻らない。	手桶を提(さ)げて「お月様はよいなあ。あんなに何もしないで静かにして居られる。妾(わらわ、北尾注:一人称)は水汲みしたり、働かねばならない」と羨ましがった。
搜索1	姉の帰りを三晩まったが帰ってこなかった。私は火の嬪神に「イナウ」を捧げ、姉について尋ねたが返事はなかった。	どうとう一カ月半。ヤイスポは火の神に妹の行方を問うと「お前は今まで一本の木幣 <small>もくへい</small> (北尾注:イナウ)も私に捧げずに。私は言わないよ」。	なし
搜索2	家の神(チセアタンバカムイ)に「イナウ」を捧げ、姉について尋ねたが答えはなかった。	外へ出て幣所 <small>へいじょ</small> の神にたのむと、やはり同じことを云ってことわった。	なし
搜索3	川辺に出て、川の神に尋ねたが何の知らせも得られなかった。	なし	なし

検索4 森1	私は森にも行って「イナウ」を作りエゾマツの媼神(Picea)に尋ねたが媼神は知らなかった。	なし	なし
検索4森2	トドマツ(Abies Veitchi)に尋ねたが無駄だった。	なし	なし
検索5 森3	柳の低木の茂みの媼神のところへ行って尋ねた。媼神は「私は柳の低木の茂みですが、おしゃべりなので、教えてあげましょう。あなたの姉は月に昇って行って、月の人と結婚したのです」と言った。	はぎ 山の萩に出かけて行ってたのんだ。萩が云うには「俺はおしゃべりだから教えてやろう。お前の妹の行方が知りたければ月を見てごらん。」	なし
結果1	私弟は非常に怒って家に戻り、黒い羽の矢と白い羽の矢を持って出ていった。最初に黒い羽の矢、次に白い羽の矢を飛ばして両手で矢の端をつかんで雲の間を抜けて空へ飛びあがった。	木幣を捧げなかつたので神々が怒って妹の行方を教えてくれなかつた。その後は木幣を削って神祭を缺かさない	女の後ろについてみた犬と一緒に、お月様の中へ這入ってしまったと云われる。
結果2	すると姉が現れた。姉は小さな女の子の手を引いていたが、そのような女の子は見たことがなかった。姉は「弟よ、どうして怒っているの？月の人のおかげでこの美しい少女と結婚できるのが分からないの？」と言った。	(知里真志保氏は、「お月さまはいいなあ、あんなに氣らくに何もしないでいられる。私は水を汲んだり…」と羨ましがったので神に罰せられて「後についていた犬と共に月中に捕われた」と説かれるのが本筋と記している。	今でも手桶を提げた女と犬がお月様の中に見える。
結果3	家の主人(神なる兄)は「私は神である。私はそなたの姉がほしいと思っていた。それゆえ桶とひしゃくを扱っていたあなたの姉を私の家(北尾注:月)に連れてきたのだ。ここで私たちは結婚し幸せに暮らしている。さあ娘を連れて行って結婚しなさい。少なくとも水汲みには困らないだろう」と言った。		

表2 月の中の伝承の比較(樺太アイヌ)

権太アイヌの月の中の人 特徴

- ◆共通点…①主人公 男女両方。小さな子供ではない。②行方を聞いたのは魚ではない。尋ねたのは火の神、植物(木)。
- ◆異なる点…①月の人と結婚した。②木幣を捧げなかったので行方を言わない。今後は神祭を欠かさないという教訓。
 - ③なぜ月の中に連れて行かれたかが十分語られていない。
 - ④一方で、お月様を羨ましがって犬とともに月の中の人になったという違う型の物語も伝えられている。

(3)ギリヤーク、オロッコ

次にギリヤーク、オロッコに伝わる月の中の人について表にする。

	名取武光『月と若水』 ギリヤーク	名取武光『月と若水』 オロッコ
話者	権太敷香郡敷香町(現ポロナイスク)オタスの杜ギリヤーク上村力太郎氏	権太敷香郡敷香町(現ポロナイスク)オタスの杜オロッコ五郎氏
主人公	天秤棒で水桶をかついだ女	男
行為1	不明	木の脂(やに)が流れて、土の中に這入って、一人の男が生まれた。
行為2	不明	また同じ木の脂(やに)が流れて、土の中に這入って、一人の女が生まれた。
行為3	不明	二人は結婚して、七人の頭の禿げた子供と七人の目の悪い子供を生んだ。
結果	犬と一緒にお月様に這入っている。(何故お月さまの中に…は不明)	二人は同じ木から生まれた兄妹であるから夫婦になったことを恥じて、妻は海の神の所へ。夫は天の神の所へ行くと云ってお月様の中へ這入った。(インセスト・タブー) 男は一人になっても食事に困らぬように鍋を掲げている。

表3 月の中の伝承の比較(ギリヤークとオロッコ)

ギリヤーク・オロッコの月の中の人の特徴

・ギリヤークは伝承の詳細が不明 ・オロッコは、インセスト・タブーと関連している

(4)ヤクート、ブリヤート

ヤクート、ブリヤートに伝わる月の中の人について表にする。

	ヤクート人1	ヤクート人2	ブリヤート人
文献	『シャマニズム アルタイル系諸民族の世界像』	『シャマニズム アルタイル系諸民族の世界像』	『シャマニズム アルタイル系諸民族の世界像』
主人公	娘	兄と妹の二人	少女
状況	ある貧しい親のない娘が、いかにも苦しい生活をしていた。		少女には厳しく冷酷な継母がいた。
行為1	月が憐れんで娘を引きとってやろうと決めた	兄と妹が水汲み場へ行く途中で立ち止まって月を眺めていた。	水を汲みに行かせた少女の帰りが遅いので継母は怒って「おまえなんか太陽が月にでも連れて行かれるといい」とどなった。
行為2	ある霜夜のこと、娘が水を汲みに行くと、月が降りて来てふところに抱いて天に去って行った。		少女は水を運びながら、太陽と月が自分の方へ降りて来るのを見た。少女は柳の茂みにしがみついた。太陽が少女を連れ去ろうとしたが月が「お前の出番は昼だぞ」と言った。月は少女を水桶と茂みごともち去った。
結果1	今もなお月の中には天秤棒の両端に水桶をかついだ娘の姿が見える	兄と妹の二人が月の中に見える。	月の中に天秤棒で水桶を背負った少女のほかにも柳の茂みも見える。
結果2		こどもたちが月を眺めるのを禁じており、とりわけ満月の時は厳しくとがめる。	

表4 月の中の伝承の比較(ヤクート人、ブリヤート人)

(5)宮古島

ネフスキーが記録した「月のアカリヤザガマの話」について表にする。

	宮古島市平良
文献	ネフスキー『月と不死』
タイトル	月のアカリヤザガマの話
話者	平良町出身 慶世村恆任(きよむらこうにん)氏(1891-1921)より聞く。(慶世村氏の祖母より聞いた話)
命令1	お月様が長命の薬を人間に与えようと思ってアカリヤザガマを御使(おつかい)としてお遣(つかわ)しになったそうです。
行為1	アカリヤザガマは二つの桶(tagu:)を重そうに担いできた。ひとつには変若水(しじみず)、ひとつには死水(しこみづ)
命令2	お月様の言附け「人間に変若水を浴せて生き替る事と長命をもたせよ」
行為2	天から長い旅をてきたアカリヤザガマが非常に疲れ草臥(くたび)れて脚脛(すね)を休ませようと思って桶を道に下ろし路端(みちばた)で小便をしていた。
行為3	一匹の大蛇が人間に浴びせる変若水を浴びてしまった。 泣き泣き死水を人間にあびせた。お天道様は怒った。
結果	アカリヤザガマはお月様の中において桶を担いで罰せられている

表5 月の中の伝承の比較(宮古群島)

特徴 月が人間に不死(長命)を与えようとしたが失敗した。月の模様とともに、人間が死ぬようになった理由について語っている。

(6)なぜ月を語るか？

月に模様があるから、その説明となる物語が形成された。そして、物語には、模様の説明だけでなく、人間にとっての疑問、たとえばなぜ人間は死ぬようになったかなどを合わせて語った。また、物語では、怠けている子どもにお月さんが怒って、お月さんの中へもっていかれるよ、と語り、それが子どもたちへの教育機能となっていた。

◆月の模様の説明

◆人間にとっての根源的な疑問の説明(なぜ死ぬか)

◆子どもたちへの教育機能

地域ごとに表にまとめた。

	アイヌ	樺太アイヌ	ギリヤーク	オロッコ	ヤクート	ブリヤート	宮古島
月の模様の説明	有	有	有	有	有	有	有
罰	有						有
教訓	有						
人の死の理由説明							有
インセスト・タブー				有			
水汲みとの関連	有	有	有		有	有	
自然・動植物	川、魚	植物	犬				蛇

表6 月の中の伝承の地域ごとの比較

3. 宵の明星の星名伝承

(1) 明治44年10月(1911年)発行の人類学雑誌に掲載された吉田巖氏の『星に関するアイヌの傳説』等

宵の明星について、「アルノマンノチウ一名チヌカラク」と記されている。また、吉田巖氏は、「両星(北尾注:アルノマンノチウとニシャッサホッノチウ)は、絶世の美女神にて姉妹であるといふ」と記している。(吉田 1911) また、『とかちアイヌ研究』には、「チコアッノチウ」について、次のように記されている。「アイヌが、舟で沖に出て、シケの為、流されて方角を見失った時、宵の明星を目標に漕げば、再びもとに上陸が出来るというので、チコアッノチウとは吾々が目当てに漕ぐ星の意味である」(吉田 1970)

(2) スワラ・ノチウ

知里真志保氏は、「ユーカラの人々とその生活(2)」にて、スワラ・ノチウについて記している。

「北の方のアイヌは宵の明星のことを『スワラ・ノチウ』と云いますが、これは『栖原(すわら)の星』ということで、栖原というのは有名な場所請負人の名であります。この栖原の漁場では、漁の最盛期になると、アイヌを昼夜の別なく働かせ、秋の日がとっぷり暮れて、東(ママ)の空に宵の明星がきらきら光る頃一と云いますから夜の九時頃にもなりましようか、一その頃になつてからやつと休めの号令がかかつて、夕食にありつくことができたというので、アイヌはあの星を『栖原の星』と名づけたということであります」(知里 1954)

末岡外美夫氏は、オンネパシクル(onne・paskur 老大な・カラス)(北部、東北部)という星名について、宮本ヌマテ媼(旭川近文)から昭和26年の春、次のように聞いた。

「昔の和人(シャモ)は頭の上にモントリ(motontori 鬘)をのせていましてね、それを子供の頃、鳥を頭にのせているって笑ったことがありました。秋の明か星の中で和人(シャモ)に星(ノチウ)がある話は聞いていましたが、今ではどの星がそうなのか知りません。スワラノチウね、ああそうですよ、それはね、モントリをのせた悪い奴の名前ですよ。とも角ひどい奴で、和人の中からも悪口を言われたもんだから、出たりひっこんだりする星になったって言っていましたね」(末岡 1979)

(3) クンネノチュウとシネップノチュウ

(二風谷でアシリレラ氏が、平賀ヤオキ氏(日高町富川)、アシリレラ氏の母「山道サキ氏」(明治44年生まれ、むかわ町出身)から伝え聞いていたクンネノチュウの話)(2009年3月)

とても無口で、人と会っても静かな物知りおばあちゃん(クンネフチ)がいました。クンネフチはコタンのすみっこにいて、子どもたちに、とても親しくしていました。子どもたちが行くどんなことでも教えてくれました。ネクラと言われても子どもたちにとっては、物知りおばあちゃんでした。

年月が過ぎてクンネフチが亡くなる前、コタンの人がクンネフチに、「ネクラと悪口を言ったけど、ごめんなさい」「わたしたちにできることはないか」と謝って聞きました。

クンネフチは、「私は、暗い夜に生まれて、生きている間も、暗い家のすみでひっそりと生きてきたけれど、私は、やみをいちばん先に照らす一番星シネップノチュウになりたいです」と言いました。

おばあちゃんクンネフチが神さまにお願いしました。シネップノチュウになりたい、と。

「私が一番先に輝いていたなら、夕暮れですよ。あなたがたも、お帰りなさい。けものたちが、腹すかして、エサを求めて出る時間ですよ。だから、その道をあけてあげなさい。アイヌ(人間)たちは、おうちに帰りなさい」

「洞窟で育った私は、いつも夜の空ばかり見ていた。私は一番星になりたいと思います」

「私が死んだら、クンネ(くらい)ばあちゃん、私(クンネばあちゃん)がいつも輝いているとき、みんなを守ってるのです」

「クンネフチが出たら危ないと、子どもに、けもの(クマ、おおかみ、鹿)が狩りをするから、早く道をけものにあけてあげなさい。早く山から降りなさい」

闇夜を守ろうとしていたおばあちゃんが星になりました。クンネノチュウだ。夕暮れに出る星のことさ。あの星出るとき帰りなさい。クンネノチュウが出たと言って、子どもたちは大喜びしました。一番星クンネノチュウが出たら、子どもたちは遊ぶのをやめて帰ったのでした。

(山道サキ氏は、クンネノチュウ。平賀ヤオキ氏は、シネップノチュウと言っていた。シネップノチュウが見えたら仕事ひきあげる。仕事引き上げて足元明るいうちに帰った。シネップノチュウが見えると、けものがえさをさがす時間。いちばんぼし。動物と入れ替わる時間だった。)

(4) 日本列島の宵の明星の星名を考える

- (1) 共通点…見える時間帯、人名に関する星名形成 (2) 異なる点…方角の目標とする事例がアイヌに見られる。北極星の高度が高く目標にするのに不適である可能性がある。

分類1	分類2	アイヌ	大和	琉球
		漁撈、狩猟	半農半漁、瀬戸内海水軍・漁民の行動力	半農半漁、海人の行動力
見える時間帯	夕暮れ・夕方	アルノマンノチウ(吉田 1911) / aro-numan-nochiw(ネフスキー1991) アロスマンノチウ(末岡 1979) / オスマンノチウ(末岡 1979)	ユーボシ(夕星)。静岡県榛原郡金谷町(現 島田市)(内田 1949)	ヨウネブシ(夕方星)伊江村(北尾 AC)
色	surugura トリカブト	キムマッスルグル(末岡 2009) 毒矢に用いたトリカブトの子根(しこん) = 附子(ぶし)、母根(ぼこん) = 鳥頭(うづ) (黄色がかかった赤色) / セタスルクノチウ(末岡 1979)	——	——
数	ひとつ	シネップノチュウ(北尾 C)	ヒツボシ(山梨県笛吹市等)(三上 C)	——
順番	一番星	シネップノチュウ(北尾 C)	イチバンボシ(一番星)北海道根室市、山口県下関市、福岡県前原市、鹿児島県坊津町(北尾 C)	イチバンボシ(一番星)沖縄県渡名喜村(北尾 AC)、鹿児島県大島郡徳之島町(松山 1984)
目当て	方角の目標	アコチパッテノチウ(末岡 1979) / アコヤウキノチウ(末岡 1979) / レッパンチヌカルコル(末岡 1979) 沖から帰るとき、北極星は高度が高過ぎた。特に日暮れとともに帰るには、宵の明星が目当てになり、アテ星という星名形成がされた。 チヌカラク(吉田 1911) チコアツノチウ(吉田 1970) アイヌが、舟で沖に出て、シケの為、流されて方角を見失った時、宵の明星を目標に漕げば、再びもとに上陸が出来るというので、チコアツノチウとは吾々が目当てに漕ぐ星の意味である。 ちこあつのちう chikoatnochiu(吉田 1989)	方角の目標は主に北極星であった。(子の星)	方角の目標は主に北極星であった。(子の方星) クレヌミョージョー鹿児島県大島郡大和村(長田 1977) 『奄美方言分類辞典』こは、「クレヌミョージョー、非常に明るく、船乗りなどの方向の目標となる」とある。クレヌミョージョーは、西の空に見える、決して北や東、南に見えないため、おおよその方角の目標となった。(長田須磨・須山名保子編『奄美方言分類辞典 上巻』笠間書院、1977)
仕舞終了		チボヤンケノチウ(末岡 1979) 舟を陸揚げする星 (舟仕舞星)	——	——
夜		クンネノチュウ(北尾 C) 夜の星	——	ユダチ(夜が立つ)。与那国町祖納、崎原用能氏(昭和22年生まれ)より聞く。「宵の明星、ユダチ。あの星があがったら、見えたら日が暮れるよー。ユー(夜)を知らせる星。ユダチ、夜(ユ)が立つすなわち夜になる。ユダチ、明るい。ユダチ、明るい星。シカマフチみたいや。」(北尾 C)
人名		スワラ・ノチウ(知里 1954)	ケンキチボシ、ゼンタロウボシ(北尾 C)	ダイケノアーヤブシ(北尾 AC)

表7 日本列島の宵の明星

4. おわりに

アイヌの月の伝承は、地域によって多様性があった。二風谷では、沙流川に生息するドジョウが伝承に登場した。また、樺太アイヌとは全く異なる伝承であった。宵の明星については、アイヌにおいては、方角の目標にするという伝承が形成された点の特徴であった。その理由として、北極星の高度が高く、方角を知るために宵の明星を用いられた可能性がある。宵の明星に限らず、他の星名についても、日本列島全体で考察していくことを今後の課題とした。

引用文献

上原 1804…上原熊次郎『蝦夷方言藻汐草』、1804

吉田 1911…吉田巖「星に関するアイヌの傳説」『人類学雑誌第二十七卷第七號』東京人類學會、1911、pp.396-401。

金田一 1936…金田一京助『アイヌ叙事詩 ユーカラ』岩波書店、1936、pp.33-36。

名取 1943…名取武光「月と若水」『北の會報 第1卷第1號』北方民族文化學會、1943、pp.12-13。

内田 1949…内田武志『日本星座方言資料』日本常民文化研究所、1949、p.320。

知里 1953…知里真志保「樺太アイヌの神謡」『北海道大学北方文化研究報告 第八輯』北海道大学、1953、pp.214-215。

知里 1954…知里真志保「ユーカラの人々とその生活(2)」『季刊歴史家第三號』北海道歴史家協議会、1954、p.50。

知里 1961…知里真志保「アイヌの神謡二」『北海道大学北方文化研究報告 第十六輯』北海道大学、1961、pp.32-34。

更科 1963…更科源藏『アイヌ民話集』北書房、1963、pp.184-185。

門別町 1969…門別町郷土史研究会『アイヌの叙事詩』、1969、pp.30-51。

吉田 1970…吉田巖『とかちアイヌ研究』帯広市教育委員会、1970、p.32。

ウノ・ハルヴァ 1971…ウノ・ハルヴァ著田中克彦訳『シャマニズム アルタイル系諸民族の世界像』三省堂、1971、pp.167-171。

- ネフスキー1971…N・ネフスキー、岡正雄編『月と不死』(東洋文庫)平凡社、1971、pp.11-19。
- 久保寺 1972…久保寺逸彦『アイヌの昔話』(昔話研究資料叢書別巻)三弥井書店、1972、pp.110-112。
- 長田他 1977…長田須磨・須山名保子編『奄美方言分類辞典 上巻』笠間書院、1977、p.887。
- 末岡 1979…末岡外美夫『アイヌの星』旭川振興公社、1979、pp.16-19。pp.130-134。pp.270-278。
- 吉田 1989…吉田巖『北海道アイヌ方言語彙集成』小学館、1989、p.19。p.89。p.115。
- ネフスキー1991…ニコライ・ネフスキー・魚井一由訳『アイヌ・フォークロア』北海道出版企画センター、1991、pp.126-141。pp.228-235。
- 萱野 2002…萱野茂『萱野茂のアイヌ語辞典 増補版』三省堂、2002、p.310。
- 末岡 2009…末岡外美夫『人間達(アイヌ列)のみた星座と伝承』2009、pp.111-117。pp.240-247。
- 阪口 2019…阪口諒「権太アイヌのオイナ」『北海道民族学 第15号』北海道民族学会、2019、pp.35-44。
- 松山 1984…徳之島町の松山光秀氏から 1984 年に提供を受けた資料
- 三上 C…三上晃朗氏による記録
- 北尾 C…北尾による記録
- 北尾 AC…北尾によるアンケート調査